

ユダヤ人と日本の古墳時代

田 中 英 道

東北大学名誉教授

皆さん、こんにちは。(仁徳天皇陵の写真を指し乍ら)ここでご覧になってるように、この前方後円墳が話題になっている世界遺産となるものです。これは私に言わせて頂ければ、日本で最初の世界遺産になっていいほどに重要なものだったのですが、やっとなったという感じですね。それほどすばらしいものです。

ここに千葉の芝山古墳から発掘されたユダヤ人の顔をした埴輪があります(図1)。司会の方がおっしゃった「日本から見たサピエンス史」という番組で示しておきましたけれども、ユダヤ人的埴輪をユダヤ人そのものと比較して示してるわけです。



(図1) ユダヤ人埴輪(芝山遺跡出土)とユダヤ教徒の姿の比較図、特に美豆良(鬢)注目

1. 文献学と形象学

ただこれについて説明する前に、これまでの古代史について述べておきたいと思います。これまでの歴史はほとんど文献史で、文献に書いてあるかどうかというだけで主にやってきたわけですね。ところがその文献の『古事記』、『日本書紀』が、ご存じのように、戦後、否定的に見られてしまったのです。『記紀』はただ藤原不比等が天皇家と藤原氏を守るために恣意的に書いたものだといわれるようになり、歴史を歪めることになってしまったわけです。私は、歴史は文献だけではないと、形象学、考古学を活用して分析も入れないと見えてこないと述べています。今までは『日本書紀』や『古事記』がつくりものとか、捏造だなどと言っても、形象学や考古学が証明しているのではないかといっているのです。たとえば法隆寺が、結局、聖徳太子不在説が出てきていますが、それは形象学が否定しています。法隆寺が飛鳥様式を示しているからです。『日本書紀』は藤原不比等が勝手に作ったと述べていますが、5世紀の鉄剣銘がそれを否定しています。『記紀』は天皇家を肯定するためか、同時に藤原不比等が天皇を操るために、制作されたという説は『古事記』や『日本書紀』の歴史自身との照応によって否定されはじめています。別の考え方が生まれているのです。

『古事記』や『日本書紀』を読んでレヴィ＝ストロース（フランスの文化人類学者 1908-2009, 図2）が日本に来て調べ、『古事記』や『日本書紀』は、神話と歴史で連続していると明言しています。彼は文化人類学者で、インディアンの研究で有名で、神話あるいはトーテムポールとか、文化人類学的に調べている学者なのですが、日本に来てこれらの神話を読み、それが今見ている日本の姿と連続してるということを感じたわけです。レヴィ＝ストロースはユダヤ人ですが、そのユダヤ人学者は、国を持たないために世界のあらゆる国を比較対照して見ることができる立場にいるとっていいでしょう。各国の神話を中立的な立場から見ることはできるのです。



（図2）レヴィ・ストロース（1908-2009）

人類はアフリカから出発したといわれます。人類の起源がアフリカだっていうことは皆さんもお聞きになってると思うのですが、日本人も元はアフリカからやって来た人々だったのです。アフリカから出発したということは、どういうことかっていうと、ユーラシアにやって来るとすると必ず通る所が中東です。とくにイスラエル地方ですね。つまりここは人々が、この大きなユーラシアを行くためにはこの辺を必ず通らなくてはいけないことになります。イスラエル地方に住むユダヤ人はこういう地方に住む人々の運命を担っていることになります。便利なところですからそこを占領しようとする民族が沢山出てくる。アッシリア、バビロニア、そしてペルシャ後になってローマ帝国がここを押さえました。紀元70年に、イスラエル人は蜂起し、ローマ帝国に破れてしまったのです。その後ユダヤ人たちはディアスポラ（避散民）になり、世界中、散ったわけですね。つまりここから出発して、さまざまな所に向かったわけです。安定して居住する所なくなった人たちが中央アジアを経て日本にまでやって来ることは容易に想像することができます。昔からあるシルクロードは古代ローマからつくられており、中国や東洋の絹をローマに持っていく中央アジアの道でした。今は中国が一带一路といって東西を結ぼうとしています。これは絹を運ぶユダヤ人の道であったわけです。われわれはこれらユダヤ商人を重視せず、日本への帰化人たちは朝鮮と中国から全てが来ると信じていました。インドの仏教でさえもこの両国から来ていると考えてきました。それがここ20年のさまざまな交流史研究、それからDNA研究によって、見方が変わってきたのです。イスラエルの人のDNAのD2という、DとかEっていう遺伝子が日本と大変共通してるんだということがわかってきたのです。このDNA鑑定によりここ20～30年「日ユ同祖論」が活気を帯びてきました。ただこの話はキリスト教の宗教関係者が述べているために、日本人がユダヤ教徒だったようないい方をするので誤解を生んでいます。「神輿がユダヤ人のアークと同じ形」とか「祇園祭がシオンの祭りだ」とかいられています。このDNAが似ているとことで、日本人がユダヤ人と同じ一神教を受け入れたかという人もいますがそうではありません。特に中央アジアの弓月国というのは、そこに古代イスラエル人の12支族のひとつの人々がいるというのです。紀元前722年にアッシリアから逃れて

ディアスポラ（離散）の状態になり、シルクロード沿いに放浪した。つまり国も、10支族が消えてしまったのです。彼らがどこに行ったかっていうような問題は、かつては日本とは関係ない話だろうと思われていたのですが、今日ではより重要に思われるようになりました。9000キロもあったとしても、人々は歩き出せば、到着しないはずがないのです。

日本の歴史はこれまではこうした話は問題にしようとしませんでした。アフリカから日本人が来たことなど考えたことはありません。もともと日本人は日本にいたと考えがちです。あるいは船に乗って来たってこともあったでしょう。こうした可能性がはっきりしてきますと、日本人は中国や朝鮮だけではなく遠い西方の方から来ている人たちも多いということが予想できるのです。そうすると、正倉院になぜペルシャや西のものが多いのか。中国や朝鮮のものは少ないことなどもわかってきます。つまり多くの西方の商人たちがやって来たことを示すのです。聖武天皇の正倉院のコレクションそれまでの皇室の受けとったものの集積なのです。

2. ユダヤ人がやって来た

『日本書紀』には15代応神天皇のとき、弓月（ゆづき）の国にいる人たちが新羅の国が彼らが日本に来るのを拒んでいると訴えています。彼らは1万8000人ほどの人々だったと人数まで書かれています。その人たちが日本にやって来たい、という報告がされるわけね。彼らは日本を特別に来たいと望んでいるのは、やはり日本は帰化するのにはふさわしい土地だという気持があったことです。また中国が、弓月国の人々を、万里の長城を造る労働に駆り立てられるということもあって、どうしても日本に行きたいと考えるユダヤ人の願望があるのです。

私は、日ユ同祖論がおかしいと思うのは、イスラエルから来る人々が、日本を支配しにやってくるという考え方です。ユダヤ人たちが自分たちの宗教を宣伝し、そしてユダヤ教徒にする、あるいはキリスト教徒にすると単純に考えていることです。日本を一神教の国にさせたいという意図があるんですね、私は、それとは逆だと思うのです。日本という国は、彼らを逆に日本の風土に同化させて、神道化してしまうのです。決してキリスト教徒にしなかったのですね。あるいは一神教徒にしない。つまりいろんな国の人があるんな所から来ましたけれど、日本人のやり方、日本の多神教や自然信仰、日本人の生き方に同化してしまったのです。それは日本人がいまだに人口の1パーセントもキリスト教徒がいないこと。一神教を信じることはできない人々が多い。

つまり、彼らは日本人を一神教化できなかつたのです。日本人が彼らより強い信仰形態をもっているかという問題になってきます。

日本が太陽が昇る島々という、地理的な大きな要因が考えられる。日本に来ることによって自然環境が非常によかったことがあげられる。砂漠地帯を通り、ヒマラヤがあって、中国の原野や朝鮮半島を通過してやってくる。日本に来るとそこは70パーセントは森であるという自然環境の素晴らしさがある。水が豊かで、まさに「エデンの園」であったと思われれます。「光は東方より」東にある理想の地は人々の憧れであったのです。

『旧約聖書』の「申命記」(28章36節)に次のように書いてあります。《主は地の果てから果てまでのすべての国民の民の中に、あなたを散らす。あなたはその所で、あなたも、あなたの先祖たちも知らなかった、木や石のほかの神々に仕える》と述べているのです。この地の果ては、日本であることを、すでに述べている、不思議なユダヤ人の言葉です。

つまり「地の果て」は太陽の昇る国であったのです。あらゆる人たちは最初、エジプトがそうであるように、全て太陽信仰から始まりです。ですから太陽信仰は源初的であるし、同時にそれが極東の日本に向かうことになるのです。世界人の秩序をつくることになる。太陽は朝、出て、必ず夕方に沈むという自然の原則をもって人々を導く。とにかく人間は太陽信仰からはじまるのです。ですから日本がまさにアマテラスが神であると同じように、世界も本当はその信仰から始まっているわけです。最果ての日本に来るということは、そういう意味があるのです。『旧約』の先程の「申命記」も、そうして渡来してきた人々の言葉をはるか昔に伝えられたものでしょう。なぜ彼らが日本まで来ていたのか。この大昔の太陽信仰が世界の人々をまずは動かしていたという考え方を取る必要があります。唯物論歴史家は「戦争があったから」とか「食べ物がなかったから、それで人々は移動する」と考えます。環境の悪条件や物質的欠乏か、しか原因を見ません。「人間は危険とか物質的欲望で動く」というような、唯物論的なことしか考えなかった。従ってアフリカから来た人がなぜ日本まで来るか、このことが説明できなかつたわけですね。20世紀というのはマルクス主義な唯物論がはやりました。信仰はあまり人間の移動の動機にならないと考えたのです。

例えば旧石器時代に日本は、3万年前の遺跡があります。特に関東に旧石器時代の遺跡があったということが注目されます。それ以後、旧石器ブームになりましたが、旧石器時代の遺跡は日本に1万数千ありますが韓国には50しかない。人々は朝鮮を越えて日本にやって来たという事実があったことになりす。旧石器時代もそうだし、朝鮮半島には縄文の時代には5000年まで人が住んでなかったとさえいわれています。ですから半島を通過して日本にやって来たという経路を人々は採っていたのです。

海外旅行から日本に帰って来ると、なぜかほっとして、日本人はみんなが外国人と違う人々だという印象を持ちます。住んでみると朝鮮人も中国人とも違う。ということは、DNAも彼らのものとは違うわけですね。それはどういうことかということ、祖先たちはすでにアジア人と異なるDNAをもっている。それが日本人であることになります。他のアジア諸国は各地にとどまって住んだ。そういう過程があったと考えられます。日本の東は海ですから。日本に行きたいと、あの島に行きたいという、そういう気持ちが船を造らせ、漕ぎ出し、努力をして日本までやって来るという、そういう祖先たちがいたということになります。その証拠に、ゴブスタンの遺跡に刻まれた舟の姿の尖頭に太陽があることでもわかります。(図3)

『日本書紀』で語られる弓月国っていう国は何であったかということ、紀元前8世紀に離散した10支族の中の1支族がそこにやって来たとか、それから古代イスラエルだけではなく、紀元後70

年にローマ帝国によって追われた人たちがディアスポラ（離散）になって人々がやって来た。まず東に行くってということが人間の本能的なものであったということと考えられます。ですから私は、世界の歴史をどう見るかについて、今変革しなければならないと思います。世界の文明の流れの基本だろうと思います。まずイスラエルのユダヤ人たちはそこを追われると東に向かうことになる。



(図3) ゴブスタン岩窟遺跡

つまりユダヤ人たちはディアスポラ（離散）遊牧民族にならざるを得なかったのです。遊牧民族は「ノマド」といって移動する人々であるという、運命をもっています。その一つにトルコ人がいます。彼らはもっと東にいたのですね。それからモンゴル族は、はるか西に移動したことがあります。つまり遊牧民族たちは移動する人々であるのです。ところが日本のような国に来ると定住して動かなくなる。それが日本は縄文のときから狩猟や漁労、採取、もちろん農業もしてるわけですが。人々は定着生活をしていました。定着しているために、日本の文化はそれぞれの土地の自然信仰の国になっていくことになります。決して遊牧民族たちのように自然を超越した神を必要とするわけではないのです。砂漠や荒野にいて移動する人々は一神教にならざるを得ない状況にいます。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教も一神教であるのは、共同体が解体しやすい。個人から救済の願望があるのです。一つの神に運命を託すのです。常に God、Deity っていうって、という超越的な存在を信じざるをえない。自然も一緒に支配する、神を必要とするのです。

ユダヤ人の文化と対照的なものに、ギリシャローマ文化があります。ギリシャ文化は、多神教で、自然信仰があります。より日本に近いといえます。しかし彼らは狩猟民族あるいは牧畜民族で、農耕民族で定着する傾向にあります。つまり、ギリシャ・ローマ・ヨーロッパ文化はユダヤ・中東文化と異なっています。他方、日本では初めて定着した生活が可能となり、自然の豊かなアジア文明の中心的な文化が形成されたわけですね。そこに安定した家族生活が営まれ、安定した定着民社会でつくられました。やはり自然の豊かな他のアジア諸国と一見似ているように見えますが、日本のような孤立した島国ではないので安定していない。他の民族が入ってくるからです。日本ではそうした場所で家族制度が生まれ国家というものができていく。その中心が天皇であるということで126代も続くという、まれな安定した統治の形を採ることができたわけですね。

中国では、宋の皇帝が日本の天皇を羨ましがったと伝えられています。宋も同じように皇帝があるわけですが、われわれは天皇というと、中国の皇帝のまねだというふう到现在まで教えられてきたわけですが、それは逆なんですね。本当は日本のように永続的に続く天皇家をつくりたかったわけです。しかし中央アジアからたくさんの遊牧民族がやって来ますから、安定できないのです。結果的に、各皇帝がそれぞれ違う民族が取って代わるわけですね。ですから結局は同じアジア的な皇帝制度、大君の制度っていうことがあっても、一貫した2-300年の単位なのです。永

続的なものがない。安定した文化を生まないのです。この自然豊かなアジア的な生き方といっても日本で初めてはっきりとその安定した文化を実現できるのです。

3. 古墳と埴輪

ここで古墳の問題に移りますと、古墳はなぜ作られたか、まさに定着した家族共同体の長をお祀りするためです。すめらみこと、あるいは大君の存在が確立していく時代でした。そのときに外来の民族がやって来た、ということです。古墳には埴輪が飾られています。人物埴輪はとくに関東・東北に多い。歴史っていうと文献が中心でしたが、このような古墳とかは形象表現です。そこでは形象学の対象です。従って中国の「古代」文献では『魏志倭人伝』が今まで一番重要だった文献といわれて、戦後はこの研究書が1000冊も本が出たといわれます。『魏志倭人伝』の書いてあることが日本の国の中に何ひとつ証拠が見出せないのです。どこに「卑弥呼」がいたのか未だにわからないのです。どこに魏志倭人伝のいう国自体があったのかわからないのです。考古学者はお墓探しばかりしていますが、一度も当てたことがないのです。九州王朝だったり、近畿王朝だったり、邪馬台国の存在の証拠は見出せないのです。

関東の千葉県にある芝山遺跡には、このようなユダヤ人風埴輪があります(図1)。こうした埴輪の姿にユダヤ人風と思われる姿は、皆さんはほとんど見たことがないだろうと思います。埴輪というと、人物埴輪はみんなかわいらしい、あるいは踊る男や笑う男などがよく知られています。埴輪を形象学の立場から研究されていないために、なぜ人形埴輪がこのような形をしているかわからなかったのです。

この埴輪群を見てますと、埴輪の中に、一連のこういう奇妙な帽子を着け、目の横に鬘(ピン)をつけている(図4)。これは「みずら」っていうのですが鬘におかしなひねりを着けているのです。これは関東の埴輪にしかないのです。関西の方はほとんど気がつかない。埴輪の文化は関西にあるんだと思われています。

私は、前は東北大にいましたから、東北地方は縄文文化の宝庫であることを知っています。しかし同時に、大和に都が出来る前、東国に文化があったと感じていました。例えば伊勢神宮と匹敵する鹿島神宮や香取神宮は関東にあります。春日大社のもととなる二つの神宮は、関東にあるのです。

そしてこのユダヤ人的埴輪は千葉の芝山遺跡だけではありません。これまで考古学者は何を言ってるかっていうと、こういうみずらを着け、帽子を着け、ひげをはやしてるっていう人物埴輪があるというだけなのです。その意味を問おうとしなかったのですね。それが戦後の唯物論の限界なのです。そこに民族的なもの、あるいはそれに象徴される人文学的内容を分析しようとしなかったのです。形の分



(図4) ユダヤ人埴輪、芝山古墳出土

類をするだけだったわけですね。だからこれがどういう人物か「分からない」って言うだけなのです。

ところがこれは、これをご覧になって分かるように、ユダヤ人埴輪なんですよ。これは全部ユダヤ人の姿をしています。みずらを着けて鼻が高いのです。これは現代のユダヤ教の人の顔に似ている。こうした姿は古い時代も同じことだったことは『旧約』にこの姿のことを書いているのです。『レビ記』に、ユダヤ人は必ずこの鬘を着けると書いています。「みずら」を切ってはいけないと述べています。それからユダヤ人の特徴として、割礼をしろと書かれています。割礼っていうのはこうした像では分からないです。こうした帽子とみずらと高い鼻ではじめてわかるわけです。

応神天皇のときに、なぜ急に巨大な古墳になったか。420メートル程にまで大きくなったか。あるいは仁徳天皇陵がなぜ525メートルという、最近の計測でも、世界一の大きな古墳をつくられたか、という謎は、天皇が偉大であったからといわれますが、その巨大建築が誰によって造られたか。その技術は誰が知っていたか謎でした。その技術と構想は古代ペルシャやローマの巨大建築を知っている人々、中東の建築を知ってる人々が造立したと考えねばなりません。中国や朝鮮にはそうした古墳はないからです。きっと外部から来た石工や大工たちの集団が建造したと推測されます。たとえば後のフリーメイソンのような存在があった。メイソンというのは石工です。各地を歩きながら自分の技術を持って廻っている。そのようなフリーメイソンが日本にやって来たとしたか考えられない。「自由な石工」。ほとんどは、ユダヤ人だったと思われます。フリーメイソンにはユダヤ人たちが多かったのです。

こういう事実が分かってくると、彼らはユーラシア大陸を超えて9000キロの距離を踏破してきたことになります。現在は飛行機で12時間ですけど、それでも「つらい」などと言われますが主に馬に乗ってきたと考えられます。動物埴輪には馬の像(図5)が多いからです。ユダヤ人風埴輪は必ず剣を携えています。今だったらピストルを持ってるでしょうけども、剣を腰につけている。時間にして3年3ヶ月はかかったのではないかという推測もあります。日本に来たときも、剣を持っています。ですから今までの埴輪研究者は、これを全部、「武人」としてあつかっていますが、その歴史的、外交的な役割を看過してしまったのです。

このユダヤ人埴輪に示される帰化人たちが来日し始めたのは、恐らく紀元2、3世紀、つまりローマ市国から紀元70年からイスラエルを追われた人々が日本まで到着したのと、3、4世紀ぐらいに古代ローマがキリスト教化して、いわゆるユダヤ人が追われた2派の到着が考えられるでしょう。さらにそれ以前にも来ていたかもしれません。結局波状的に3段階ぐらいで来ると私は見えています。紀元前の最初は721年頃にアッシリア捕囚となって、ディアスポラ(離散)したユダ



(図5) 馬形埴輪 芝山遺跡

ヤ人たちが『申命記』にあるように「地の果て」日本までやって来たと考えられます。むろんこの時期のユダヤ人の来日の証拠はまだ明らかにされていませんが、船で来た可能性もあるのです。船だと荷物やいろいろな物資を持ってこれるわけです。もっと後の7、8世紀の話ですが正倉院にある物品は、船で持ってきたものもあるはずです。

実をいうと、このユダヤ人風埴輪のことを、2018年12月に、イスラエルの日本学会で報告を致しました。世界で日本学を研究している学者の多くはユダヤ人です。彼らは日本人に非常に関心を持っていますからね。そういう人たちがアメリカ、イギリス、フランスでも大体優秀な日本学者なのです。もっとも日本学とは限らず他の分野も優秀な研究者はユダヤ人が多い。私はフランス、イタリア、ドイツで留学しましたが、優秀な先生はみんなユダヤ人でした。ですから大学というところは、ユダヤ人の学者によって主導されているのです。

また自分たちが、キリスト教徒によって差別されているという意識がある。一方、日本人も西洋人から差別されていると彼らは考えています。ということで、日本人に同情しています。ですから日本の学者が向こうで成功した人、あるいは日本の企業家で、ソニーやホンダもそうですが、ユダヤ人によって助けられている。日本人とは引込み思案の人が多いのですが、技術や才能もっている。彼らも、そういう人たちに知り合いになれば助けてくれるのです。日本に来た帰化人たちは、日本に同化せずに、日本の伝統と文化をこわす方向に行かず、守る方向に行ったのです。例えば8世紀、奈良時代道鏡という考謙上皇の寵を受けて天皇の地位を奪おうとした道鏡の不遜な行為を、直接制止しようという動きに出たのが宇佐八幡宮でした。八幡宮は秦氏の創立した神社であったのです。

4. 秦氏の活躍

秦氏は色々な名前をもっていました。例えば群馬に行くとき多胡氏として活躍しました。中国では「胡」を付ける氏族は西方の人々のことです。やはり秦氏系です。多胡氏は群馬に住んでいました。今でもこの土地には多胡さんが多いのですが、7世紀の中心人物は、多胡羊太夫という人でした。その氏族たちが銅の技術を持っていたので、それで和同開珎という、日本の最初の貨幣を造られたのです。それで藤原不比等が和銅元年（708年）にこの貨幣を発行したのです。

多胡氏が発見したのは純粋な銅だったので、それで貨幣ができたのです。藤原不比等に進言して、「これで日本は貨幣を造ったらどうか」って述べました。これまで日本は全てお米だとか絹だとか、物々交換をしていました。貨幣を行えば、それが一人立ちして、貸し借りができます。そのときに利子をとることができます。ユダヤ人たちは商人として、この貨幣を利用して、儲けることを考えました。しかし日本では貸したら、つまり必ず返すときには少しお札を付けることもしておりました。例えばお米を商品価値の基本にして交換を行ってきた。江戸時代は、石高で大名の財産を示していた。何十万石の大名だということはそれだけ米の石数が多かったわけです。1石というのはお米の量は1人が1年間食べられる量です。だから何百石ってあれば何百人が食

べられる、それだけの財産を持っているというのが日本人の価値の基準だったのです。8世紀もそうでした。

ところがそこに帰化人の多胡氏が、貨幣で換算するように変えようとした。和同開珎を提案したのです。藤原不比等も賛成しました。ですから多胡氏が藤原氏ではないかという説もあるほどです。いずれにしても藤原不比等が多胡氏の勧めでお金を日本で使おうということに決めて、和銅元年（708年）という新しい年号にしたのです。

ところが、日本にはその貨幣が広まらなかった。米という現実の食糧の量で測る法がいいとしたのです。物々交換で等価交換が日本の基本ですから。お金を使うと、お金の価値が自立してくる。その観念は、持てないものですから。日本は貨幣を使わなかったのです。政府は貨幣を使わせるために、お金を持ってる人に1階級あげ、貴族にすることにしましたのです。つまりお金を持ってる人が、貴族の階級をあげるとい、西洋や中国ではすぐ乗ってきそうな制度をつくったのです。それでも日本人は応じなかった。米の方がいいというわけですね。

お米っていうのは自然の恵みですから、そういうものを持つということは、自然から与えられたもので非常にありがたいものだと思っていたからです。ある種の自然信仰ですね。米であれば、不作のときには国からお米を借りる、そして返すときは倍にして返すというようにお礼の気持ちがあったと思われま。皆さんもお中元やお歳暮のような気持ちで返すわけですね。それは利子を付けて返すのと違う。

日本はそういう利子の概念がないのです。帰化人たちはすでに利子の概念があったわけです。ユダヤ人は古代ローマから利子で金もうけはやっていた。彼らは土地を持ってないからです。お金でもうける、ということには、たけてたわけです。それを日本に持ち込んだんだけど日本では成功しなかったこととなります。日本の貨幣は、大体その後は宋銭だとか中国のお金を使っていたのです。江戸時代になって貨幣が使われるようになりました。明治になって銀行制度ができて利子を取るようになりましたが、そのときでも借りたらそれに付けて返すってのはお礼の気持ちだっていう気持ちが残っているような気がします。ですから日本の資本主義っていうのは、ある意味で西洋と違うんだっていうことも言えるでしょう。これも大事なことだろうと思います。つまり日本人にとっては常に感謝の気持ちという感情が人間にとって大事だということです。

関西はほとんど人物埴輪がないっていうことは、彼らあまり尊敬されなかったんだろうと推測しています。関西には形象埴輪が多いのです。これは、人物たちが尊敬されるというよりも、埋葬者が生前に行なったことを、形象埴輪に残すことに意味があったのかもしれない、ということです。図の1や3に見られるように関東のユダヤ人埴輪には「みずら」がつけられています。「みずら」は実を言うと、天武天皇がこの「みずら」をやめようっていうことを述べておられるのです。そのときまでは聖徳太子の皇子たちの姿のように「みずら」を着けていました。そうした頭髪の形をやめるようにさせたのです。

その秦氏の中心人物は秦河勝でした。彼は聖徳太子を助けた人物です。広隆寺を創建し、神社

を造立し、京都太秦^{うずまさ}の地域を秦氏の土地としていました。聖徳太子を蘇我氏と共に助けました。秦河勝がいた頃まではユダヤの人たちも表に立って活躍したのです。

彼らは日本の言語形成に貢献したと思われます。ユダヤ人のアイデルバーグ氏書いているのですけど、日本語の 3000 語はヘブライ語から来ているといっています。これも聞いた方も多いかもしれませんが重要なのは、書き言葉、例えば「書く」というのは文字を書くことですが、日本には文字がなかったわけですから「書く」という言葉がなかったはずなので、ヘブライ語の「かく」がそのまま「書く」になったと思われます。

言語学者の大野晋氏の説によると、インド南部に日本語に似た言葉が多くあることで指摘されて、それが大体 300 語似ているというのです。またテュルク語を研究された方は、日本語と近いというのですが、日本語と比較するとやはり 300 語ぐらい似てるといっています。300 語でも多いですけどね。ヘブライ語は、アイデルバーグ氏は、3000 語似てると述べています。中国の漢字を訓読みするときに、ヘブライ語を使ったんだということにもなります。これまで日本語と中国の関係しか日本語を形成する要因はないと思われてるのですが、そうではないことになりました。

ここでわかるのはいかに日本が国際的な存在だったということがよく分かります。DNA 鑑定するとユダヤ人に日本人に似てることが血液鑑定から言われています。

京都に太秦がありますが、これは秦河勝が所有していた土地です。そこには大酒神社があり、三つの鳥居が一つになっています。これはユダヤ人の持ってきたネストリウス派の三位一体の神をあらわすといわれています。ネストリウス派っていうのは、佐伯好郎氏っていう、明治の学者がよく調べておられ、その影響だろうとされています。また彼らが中央アジアの弓月国から来たと言っているのです。弓月国というのは、これはまさにネストリウス派のキリスト教徒の国だったというのです。聖徳太子が厩戸王子という名称にも関係しているそうです。

この「厩戸の皇子」という名前は馬小屋の前を通った母が生んだ子という意味で呼ばれたというのです。やはり、キリストが馬小屋で生れたことに関連づけたものと理解するように書かれたものでしょう。ところが聖徳太子はキリスト教徒ではありませんでした。しかしそういう精神は知っていて書いたのでしょうか。その周りに秦河勝がいたと考えられます。

聖徳太子がキリスト教を知りながら仏教を選んだことは、大変示唆的です。そして太子は根本的には皇太子ですから神道の祭祀を行っていたはずですよ。

聖徳太子の時代の前の古墳時代というのは祖先信仰の時代でした。特に皇祖霊信仰、御霊信仰の時代で、まさに神道の時代でした。100 メートル近くの大きなお墓を人々は造り、大小合わせて 20 万近くもあるといわれています。前方後円墳でさえも 5000 ～ 6000 あるわけです。それからまた、前円後方墳でさえ 100 メートル以上のものは数百あるわけですね。そのくらいエネルギーを持って造っていたということは、皇祖霊、あるいは祖先の霊がいかに大切かを人々が強く感じていたからでしょう。これが日本の大切な信仰であったわけですよ。まさに人々はそれが大事なこ

とだと感じるに違いないわけですね。いずれにしても日本に渡来、帰化することによって日本文化が活性化し、他の宗教、他の文化を忘れさせてしまう文化を日本人が持っていたということです。

5. 日本の神社の形成

日本の最も有名な神社である八幡神社、稲荷神社、松尾神社、大避神社、これ全部秦氏の関係した神社です。広隆寺もまた仏教寺院で太秦にありましたが、秦氏、秦河勝が建てたわけです。稲荷神社ですが、稲荷だから「おいなさん」、という農業の神のようですが、それに誰も疑問を持ってないでしょう。これは秦氏によって創立されていました。「これはキリストの INRI から来たもの」と言われています。つまりネストリウス派のキリスト教のナザレ人という意味だということですね。INRI って何かっていうと、「ここにユダヤの王がいるという」という意味です。稲荷神社の鳥居は赤いのはキリストの流された血だそうです。稲荷神社は3万も、4万も日本中にあるわけです。それを稲という字をあてて米の神にしてしまったのです。農業の神様、あるいは実業の神様になりました。

先程少し述べましたが、もう一つの数多い神社である八幡神社があります。八幡神社っていうのは、応神天皇を神様として祀っています。この天皇がまさに弓月国からユダヤ人たちが入ってきたときに助けた天皇なのです。弓月国の人々が日本に向かうために、待機していたのを、応神天皇が日本に招き入れてくれた。武力で新羅を討ってくれたと恩義を感じたのです。彼らが来たんだと、その感謝の気持ちが八幡神社を建立させたと思われます。

こうした秦氏の考え方も日本にとってプラスに働いたと考えられます。日本人にない。日本人は非常に平和的に常に国を譲るといふ自然な気持ちで運営してましたけれども、彼らがやって来ることによって形を与えられた力を加えられた。そういう形式性が加わったと思われるのです。だから、仁徳天皇が秦氏に太秦^{うずまさ}っていう所をお与えになったことは知られています。仁徳天皇がなぜそうおっしゃったかっていうと、秦氏がこの渦のような糸を、つまり絹の糸と布が渦のように大量に寄贈したことを非常に褒めて、「うずまさ」に土地を与えたのです。

応神天皇、仁徳天皇陵は巨大です。この時期のこういう武人埴輪が関東でつくられているのですね。こういう人たちが、両天皇に造成協力したと考えられます。

縄文・弥生時代が戦争の痕跡がほとんどない時代でした。大和（古墳）時代の10代崇神天皇以降、争乱が起こるようになり、以後45代天智天皇まで続きました。争乱の時代に、このような帰化人たち、とくに秦氏がかなりがあったと考えられます。秦氏が大陸で武器をもった遊牧民族（ノマド）の経験をしていたのです。しかし注目すべきはその時代でも皇室の統治形態は一貫して守られていたことです。そこに彼らの武力が有効に生かされたのが考えられます。この武士の始まりに戦う感覚を持っている遊牧民族、ノマドの習慣。生きることは戦うことだという感覚が日本に入って来たことによって、日本人が日本を守るという感覚を知ることになったと考えられます。

それはユダヤ人埴輪が常に刀を携帯していることでもわかります。

『記紀』や『万葉集』にあらわれる防人（さきもり）は関東から行っていることがわかります。このような帰化人が訓練したと思われるのです。防人というと、貧しい農夫が駆り立てられて九州や僻地に送られた兵士のような存在のようにいわれますが、そうではないのです。つまり関東にこういう訓練された武人たちがいたからこそ、そこから派遣されたのです。

おわりに

最後に言いたいことは仁徳天皇陵にしても応神天皇陵にしても、今は緑に覆われてますが、もともとの状態は、前方後円墳（私は前方後方墳とすべきと思いますが）美術史家としても歴史家としても、天皇陵は最初の姿に戻す試みをすべきだと思います。もともとピラミッドのような非常に構築的な姿をしていたことはおわかりだと思います。こういう姿



(図6) 仁徳天皇陵復元図

に復元することが必要です（図6）。皆さんの祖先の墓が雑木林になっていたり汚かったら、きれいにするでしょう。最初に建てた姿で常に保っていくということが祖先に対する尊敬の念を持っている証拠になるわけです。せっかくこういう特別大きな立派な天皇陵の姿をしていたわけですから。これからの技術を使って、正確に復元できないはずなのです。それを子孫として絶対すべきことだと思います。それで初めて世界の、まさに遺産になるわけですね。

ただ木で覆われてるままですと、それを見たら世界の人は、単なる緑の鳥じゃないかっていうだけになります。ところが修復・復元をやれば、古世の日本の姿が、ユダヤ系帰化人のもたらし西方からの技術によって完成されたことがわかります。この当時は日本では文字のない時代でした。それをこのような巨大な形象の構築物をつくることは、文字よりも形象の方が重要であることを認識させます。

参考文献：田中英道『発見！ユダヤ人埴輪の謎を解く』勉誠出版、2019

田中英道「ユダヤ系秦氏の歴史的系統」『日本国史学』15号、日本国史学会